

(上)

(第一段)

近衛のゐんの御宇、きふじゆ二年のころ、鳥羽のゐんの仙洞に一人の下女あり。後には玉ものまへとぞ申ける。天下無双の美人、國中第一の賢女也。雲のうちにみよのかむざしこまやかにして、李夫人のかたちを見す。いしやうにたきものせざれども、らむじやの匂ひかうばしく、かたちにつくろひをこと、せざれども、ひめもすに桃李のよそほひをほどこし、寵愛きはまりなし。院中のひとく、たかきもいやしきもこれをもてなしかしづかずといふことなし。けんじやふゑんのさうをそなへたる故に、やうじゆの影向かとうたがはる。じやうぢうふしのとくをげんずるゆへに、天人のへんげかともおほへ、年のよはひ、はたちばかりのうちとぞみえける。か、りければ、ゑいりよふかくおほしめして、大臣、諸卿もあやしみをなす処に、ゑみをふくみ、こと葉をやはらげ、ないでん、げでん、仏法、世法まで、いさ、かのつまづきなく一くにしやくし申されけり。少も本説にたがはず。あまりのふしぎさに、此下女に物を御たづねありて御らむせんとおほしめして、院、たづねさせおはしますやう、(一) (第一図①) (二) (第一図②)

(第二段)

そもくしやうげうの中には、ほんなふそくぼだい、生死そくねはんといへり。日々夜々におこる所の念は、皆是ほんのふ也。されば、生死をいとはずとも、このほんのふをはたらかさで、ぢきにぼだいに入、ねはんをせうずべきかとおほせられければ、女こたへて申やう、女性の身にていかでかさやうのことをしり候べき。さりながら、過去のごうゐんにひかれて、なむによのかはりは候へども、身のうちのぶつしやう、ほんしやう、一たいのことなれば、男女の不同あるべからず候。そのゆへは、(三) ほんのふすなはちぼだいなりといへども、おもひにまかせ、

ほんのふをおこせば、いよくほんのふぞうてうす。ほんのふすなはちしやうじなるがゆへに、おもひにまかせてせんしん心をなせば、生死いよくつくる事なきがゆへに、身にかいぎやう、いぎをほんとす。心に生死をいとひて、ひとへにぼだいをおこすべし。あくのす、むがゆへに、ほんのふの風あらく吹て、ぶつしやうのちすいことくこほりとなれども、せんしんのゑにちたかくか、やく時、ほんのふの氷とけて水となる。是皆善悪の二事におゐて、不二なるがゆへ也。世間のだうぞくを見るに、ぼだいにしやうじんせず、はかいにしていぎをまもらず。たまくぢやうに入てぎいてをあらはむとすれども、さんらんのなみ、きはひおこりて、一ぢんも清からず。まれにぶつぞうにむかひて、めいあむをさとの月に照さむとおもへば、ほんのふの雲あつくおほひて、長夜の闇ふかし。たゝおむる処のほんのふ、まうざうにめをかけずして、散乱の心はこれ何ものぞ。まうしん心じん何れよりおこるぞと、しりやうし、せうけんし候はゞ、じねんにねほんのだうくわをあらはして、たちまちにめうたいをせんずべし。ちゑもなく、だうしんもなき人のまへには、仏法、世法、隔ありといへり。だうしん堅固の人のまへには、何物も仏法にあらずといふ事なし。こ、をもつて、或は一色一香むひ中だうともいひ、じつさうあかし。或はぜつそうごんごみなこれしんごむともとける。顕密二教のうちに、何れも皆実相也。世法の中にまたく出世の法なし。悲しきかなや、現在めのまへの仏法をしらずして、ぼだいを遠しとおもふ。哀なるかなや、(4) 身仏果なりとさとらずして、空舗しんしやうをごする事、たとへば一しをへだて、けんりとおもひ、しよじやくをさて万里とおもふがごとし。世間しゆつせひとして、またくべちのものにあらず。たゞ悟るとさとらざるとのちがひ也。まことにさとりをひらき給へる大しせんどくの書置給へる本文に、少もたがはず申たりければ、院をはじめまいらせて、御所中の上下聞及ぶ程の人々、耳

をおどろかし、したをふるわざずといふ事なし。此女の口のき、やう、弁舌のとゞこほりなさを聞しめさんとおぼして、重て仰らる、やう、女性のかやうに智恵才覚のある事は、昔も今も見ず、聞ず。あたかふるなのけんげかとも謂つべし。龍女の再誕かとぞおぼゆる。世間にふしぎの事多き中に、天に川に似たる物有。我朝にては、あまのがわとなづけたり。まことに空に川のあるべきかと御尋有るに、こたへて申やう、しやうげうのおもてにめい／＼にとけば、いかでかしろしめさで候べき。

是は一かう御物わらひと覚へ候へども、経にはたいしやくのり給へる大象のいきと社見へ候へ。わたくしの了簡には、一切の物に必せいと申もの、候へば、雲のせいとこそ覚へ候へ。そのゆへは、雲といふは天地のいきなり。月の出たる時は天の川きえ、雨のふる時は天の川ます。雲ねつしてあつきときは雨ふり、雲のはるれば雨なきがゆへに、雲の中にはあまの川せいとして候かとおぼえ候と申。これにつけて仰らる、やう、あまの川は雲のせいと誠におもしろし。一切のものにせいと申物のあらば、青、黄、赤、白の中に、れんげのせいはいづれぞと仰らるれば、

(5) (第2図) (6)

(第三段)

しやうれんげをせいとして候と申。一切の草木の花の中には、何れのはなをせいとすべきと、しゆまんなのはなをせいとす。沈香、白檀、れう、もろ／＼の香の中には、しやうぶつせんだんをせいとして候。一切の玉の中には、如意宝珠をせいとして候。海には、大海をせいとす。もろ／＼の山の中には、須弥山をせいとす。もろ／＼のかねのうちには、こんがうをせいとす。もろ／＼の龍の中には、沙渴羅龍王をせいとす。諸のけだもの、うちには、獅子王をせいとす。人の中には、まけしゆふてんをせいとす。諸の経の中には、法華経をせいとすと、一々にいらへ申す。およそ一をとへば十をこたへ、あさきよりふかきに至るまで、何

事もとはせ給ふにしらずといふことなし。(7) (第3図) (8)

(第四段)

まことに権者のけんげとおぼしめして、うちとけがたくおぼしめす。一たびゑめば百の媚あり。さいをが顔色もいまこゝに有と、御愛念ふか、りけるによつて、すんぶんも御かたはらをはなれず。うへにはけしやうのまへと名づけたまへども、御きそくはひとへに女御のごとし。ある時、なが月はつかあまりのころ、秋の名残を惜ませたまひて、清涼殿にして、詩歌、管絃の御あそびありけるに、ゐんはけしやうのまへを御そばにおかせたまひて、みすのうちにわたらせ玉ひけり。折節あらしはげしくて、とふろの火を吹けす所に、けしやうのまへの身よりひかりをはなち、か、やかす。これはいかなるちんべんと、大臣、公卿あやしみて、四方を見めぐらす処に、みすのうちより出たる光なり。(9) (第4図) (10)

(第五段)

朝日の光に異ならず。管絃をさし置いて、ひかりのあやしきことをそうもんせし処に、おほせ出さる、やう、不思議のこと也。是に侍る女の身より光をはなちたるこそふしぎなれ。世間しゆつのこと、かゞみにかけてるごとくに申だに不思議なるに、おのづから蘭奢の匂ひにみちそひて光をはなすは、権者にもあらず、是ひとへに仏菩薩のきやうがい也。昔迦葉尊者のゐんゑんをきくに、きはめてまづしき女人にてまし／＼けるが、こがねを一両もとめて、みづからゑようにはせずして箔師にあつらへはくとなして、だうのうち御めんそうのはげ給へる仏のおはしけるを、さいしかせ、びん乏のさんげをして、はくしと、もに仏道ならむと契りたりけるが、その、ち五十一劫が間、生る、たびごとに、金色の光を放ちて、終に仏の御弟子と成て、かしやう尊者といはれ玉へる事、仏におし、処の箔のゑん朽ずして、その身金色にして、如来の正法を伝へ玉ひし也。今此女の内典、外典くからず、智恵、才覚の人にすぐれ、身よ

り光をはなち、匂ひを出すは、前生にいかなる善根をかうへけん返すくふしぎにおほへ、則じん倫にじゆんずべからず。肉身大じとおほゆる。なをふしぎのことあらば尋ね申せと御きそくありて、みすをあげさせ玉ひたれば、廿日あまりの宵闇なれども、昼よりも明らか也。此程はけしやうの前と申つれども、今の光につきて、玉藻の前とぞ申ける。かやうの有難きけんげの人にはべちに名といふこと有べきやうはなければども、わくれうどんぢんとて、いかなる仏菩薩なれ共、人倫にまじはりまします時は、其名を呼習ひ也。玉藻の前と申べしとぞ仰ける。何事も過ぬれば、かんもかろく成、其興もおとろふにや、此光を放ちてよりは、少おそろしく思召て、御側には侍ひけれども、日比のやうには思召ざりけり。何ごともふしぎ有ば尋ぬべし御きそく有ければ、(11) (第5図)

(12)

(第六段)  
末座に候ける若殿上人す、み出て申されけるは、管弦はかたのごとく相伝仕りて候へども、五音と申をあきらめず候。およそくはんげんと申は、五音を心得て、時の調子をふんみやうにしりてこそ、其けうも出来、そのかんも催すことにて候へば、五音にくらくては、仕る所の管弦、さだめて調子にはづれ候らん。五音のおこりをいかゞあきらめ候べきと申されければ、こたへていはく、五音と申は、五臓のいきよりわかれて候。そうでは、かんのぞうより出たるいきのね、是は春也。一切の草木の生ずる時分也。一切の物は生をもつてよろこびとするゆへに、よろこびの声とさだむる。又わうしきの調子は、しんのぞうより出たる息也。是則夏也。一切の有情類、一切の草木、みな榮ゆるゆへに、よろこびのこゑと名づく。また一こつてうは、ひの臓より出たるいきのおとなり。これは土用をつかさどる物也。土はいつもおとろふることなし。万の物をはごくむたのしみあるがゆへに、是もよろこびの声とさだむ。これらは

かたのごとし。平調は、はいの臓より出たる息の音也。これは秋をつかさどる。秋は万の草木のやうくのかはり、風のおともさびしく、鹿の音、虫の声も哀を催す。十二因縁ことほりをあらはすがゆへに、あはれみのこゑとさだむ。又盤渉てうは、じんのぞうより出たる息のねなり。是は冬をつかさどる。何につけてもきはまる時分也。これを人間にたとへば、定命六十二年也。ゆめのうちに夢を見るも猶はやし。ひまゆく駒のごとし。きのふはけふのむかし、今日は明日のいにしへ、うつりかはるうきよのならひ、ふ(13) ゆうといふ虫のあしたに生れて夕迎に死するよりなをはかなき身、頭の雪、眉の霜、ひたいには年月波をた、み、朝夕なみだの袖をうるをすばかり也。かるがゆへに、かなしみのこゑとさだむ。又上無調は、そうてう、わうしきでう、一こつてう、此三つのでうしにはづれて、するしりよこゑをいふべし。又しも無てうは、平調、盤鐘調、これふたつにはづれて、しかも律の声をいふ也。上むてうは父とす。下無てうは母とす。此ふたつのでうしをくはへて、六調子とは申也。かやうによくく思量して調子をさぐる也。又十二律と申て、しさいなしと申ければ、御座につらなる大臣、公卿、一同にしたをふり、とかく申におよばずとぞ申されける。(14) (第6図) (15)

(第七段)

また琵琶のやくに候ける人のとひ玉ひけるは、びははるかた相伝仕りて候へども、いかなる人のつくりはじめ、いづれの人のひきはじめて候ひけるやらん、その根元をしらずと申されければ、こたへていはく、ふぎしのでうしははじめ給ふ。長さ三尺六寸、一年中三百六十日にかたどり、緒をかくる事五筋、是は五行にかたどれり。しうしよにいはく、文王はじめて琵琶をひき一の緒をくはふと。是を名付けてぶんをといふ。その、ち又武王一の緒をくはふ。これを名づけてぶ緒と云。此七の緒をきう、しやう、かく、ち、う、是也。またはぶんともいふべしと申す。つぎに

横笛のやく、笛は相伝仕りて候へども、その源をしらずと申されければ、やがて笛はばかんと申人のつくりはじめたり。或時、池のほとりを過るに、水のうちに龍の吟ずる声したるを、あまりの面白さになをきかんと立より、やすらひけれども、やがて天にさがりぬ。その、ち竹を切て吹に、すこしも龍の声にたがはず。又うてきといふ人、七さいにて王宮にそなはりぬ。天下大きにかんばつす。王、是をかなしみ玉ふほどに、夢のうちに笛二、えたもふ。一をばかんとてきといふ、いま一をばうてきといふ。夢のうちによろこび、さめて是をふけば、雨おびた、舗降ぬ。またかんできをふけば、やがて天はれて雨やみぬ。さて、此だいをたもち給ひて候と申侍りき。」(16)

(下)

(第7図)(1)

(第8段)

またしやうのやくつとめておはしける人、しやうの根元をとの給ひければ、しやうとをうをばふしぎしのいもうと、まいくわといひし人、つくりはじめ給ふ。かのまいくわと申は、腰よりうへは女也、腰より下はじや也。簾を作りてふきしかば、六月に霜降ことおびた、し。又しやうを吹しかば、鶯かけり来て鳴と申。また、たいこはととひければ、しんのぼうこふと云人。またほうわう山と云所に、石の鼓有。彼つゝみのなる時は、天かきくもり雨ふりけると聞伝へて候と申。又かねは、ふしといひし人いはじめけるが、ふ山といふ山に霜の降時、かならずなると申候。又院詩を問せたまひければ、詩はりれうと云し人、つくりはじめ候と申候。硯は、しろといふものが作りて候。筆はもうし、墨はなむと云し人のつくりはじめて候と申候。又紙は、さいりんと申もの、すきはじめて候と申。また扇は、班せうよと申もの、作りはじめて候と申候。また車

293

は、さいちうと申もの、しいのめぐるを見てつくりはじめて候と申候。碁は、せう王の子にたんしゆと申人のあんじ出して、うちそめて候と申候。すぐ六は、しけんと申もの案じ出して、一年中を考て、盤の目を十二にわりて、又一月卅日にたとへて、白は十五日迄月の光の明らかなるにたとへ、黒は下十五日より闇にたとへ、合せて三十の石とす。きをひおくれれば、世間のさだめなき無常にたとへ、その外深きほうもん有げに候へども、それまでは申に及ばずと申候。またいや、かぶりはいつよりぞととひ給へば、くわうていのつくりそめさせたまひて候。またよろひは、しやうがつくりて候と申候。又五穀のたぐひは、神農の作りはじめ玉ひて候と申候。又汲井は、はくやくがほりそめて候。宮寺は、漢の明帝の時より作りはじめ給ふと申候。およそ内でん、げでん、から、しんだんのことに至るまで、一事もくからずこたへ申けるほどに、院をはじめまいらせて、おのく、あさみほめぬ人はなかりけり。」(2) 院はこれをちかづけ給ふこと、そらおそろしくおほしめしけれども、なんゑんぶだいには第一の美人とも申つべしとて、御こ、ろざしのほどだにことなり、かうかんのゆかのまへには、はるかに千年の松にちぎりを結び、かうれいのむしろのうへには、遠くばんごうのきよしむおはします処に、おもはざるに玉体ふよふの御けしき、よのつねの御かぜの気ともおほへさせ給はず。日にそへておもらせ給ふ。典葉頭を召て御尋有りければ、此御悩つねの御ことにもあらず。御邪氣にてわたらせおはしますとおほえ候。医道の御れうじかなふべからずと申あひだ、さらば陰陽のかみやすなりをめされてうらなはせられければ、しよせん此御悩につけて御大事出来りぬと存候。いそぎ御祈祷をはじめらるべしと奏しけるあひだ、上下大きに驚て、南都北嶺の貴僧高僧、諸寺諸山の有験行徳の人をめして、大法、秘法の御祈祷あり。すでに三七日の結ぐわんにおよぶといへども、つるにそのしるしなし。玉体いよく御衰微有ければ、あぢきな

294

くおぼしめして御涙をながし、玉藻のまへが手を取て、ぶんだん生死の  
ならひ、ぬしとてもたのまれず、むじやうのさかひなれば、おくれさき  
だつならひをば、かねてより思ひしるといへども、あへなくわかれんこ  
とをおもへば、ひとつめつのだうにまよひて、ながきわかれのことはり  
をわすれぬべしと仰ありければ、」(3) (第8図)「(4)

(第九段)

玉藻のまへ申けるは、われらていの凡夫、わうじやくのものと申ながら、  
かたじけなく昇殿をゆるされまいらせ候のみにあらず、あまさへてうあ  
ひをかふぶりに龍顔に近づき奉る。是前世の宿習、過去の戒行、有がた  
くおほへさぶらへば、ひ、さうの八万劫もたせおはしませかしとこ  
そ、きねん申処に、もしいかなる御事もわたらせおはしまさば、一日片  
時も世にながらへ侍るべしとおほえず候。われらしやうがくの末まで  
も御とも申たく候へとて、なみだをながして臥しづむ。偕三七日の御祈  
禱もげんなくて、僧衆もせうく退出有けり。猶もさまざまの御立願有  
といへども、そのしるしみえず。いかゞすべきとて、やくゐのかみ、陰  
陽の頭あまためされて御尋有けるに、やすなり申やう、勘文のさす処、  
委細申上たく候へ共、若ゑい慮に背き、後難もや候はんずらむとしんし  
やく仕りて候と申ければ、たゞ憚る所なく、一々に申上べきよし、おほ  
せらるゝ間、その時泰成申やうは、御悩はべちの子細は候はず。玉もの  
まへのわざにて候。此人うしなはれば、御悩は御平癒あるべしと申けれ  
ば、公卿一同に御悩はさしおきて、是を又歎きあへり。かさねて評定あ  
りて、委舖御たづね有。やす成申やう、下野国に那須野と申所に、八百  
歳を経たる狐也。たけ七ひろ、尾二ある狐なり。此由来を申せば、仁王  
経にとかれて候。昔天竺にひとりの王あり。名をば班足太子といふ。此  
太子、げどうちせつの教訓によつて、千人の王の首を切てはかのかみに  
まつりて、その位をとらんと心ざして、数万の力士、をにのわうをあつ

めて、東西南北、遠近の国の王城へおしよせて、王をからめとるほどに、  
九百九十九人の王をいけどりて、今一人の王かけたり。いかゞせむと評  
定有ける処に、外道また申やう、これより北へ一万里を行て王あり。名  
をばふ」(5) やう王といふ。その王をとらへて千人の数にみてさせ給へ  
と申ければ、力士をつかはしてまた王をとりぬ。すでに王のかずみちけ  
れば、一どに首を切て、はかのかみにまつらんとしける。ふみやう王、  
たな心を合せて班足太子に申やう、ねがはくは一日の暇をゆるし給へ。  
三ぼうを頂礼し、沙門を供養せんと申ければ、一日のいとまをゆるされ  
ぬ。其ふみやう王、過去七仏の法によりて、百人の僧を請じて、般若波  
羅密をせさせしに、第一の法し、ふみやう王のために、偈を説ていはく、  
こうしやうしゆん、けんこんとうねん、しゆみかい、といけやうと、き  
ぬ。そのふみやう王、此げを聞て四たい十二因縁のむねをさとる。ほう  
げんくうをえぬ。班足太子も同じくしよほうくうの道理を聴聞して、た  
ちまちにあくしんを翻して、千人の王にあひてのたまはく、もろくくの  
とがあるにはあらず。我外道にすゝめられて、あくゐんにひかれぬ。今  
はおのくく本国にかへりて、般若を執行して、仏道になり給へとてかへ  
しぬ。班足太子も道心をおこして、むやうほうを得たと見へたり。む  
かしはんそくたいしのまつらんとせしはかのかみといふは、今のきつね  
也。仏法のありきによつて、くびをきらざる間、仏法の敵として世々生々  
をふるとも、狐の身をうけて仏法繁昌の国ごとに現じて、更衣、采女と  
なつて、龍顔に近づき、王の命をうばひ、我国の王となさんとちかひけ  
る。されば漢土にては褒姒といふ后に成て、七ひきにげむじて、国王に  
ならんとしけれども、日本は粟散の小国なれども、仏法繁昌のくにたる  
あひだ、今すでにあらはすべし。是則玉藻の前なりと申ける間、ひそか  
に此ことを奏聞しけれども、御信用なし。御悩はしだいにおもらせ給ふ。  
いかゞせんと評定有けるに、」(6) (第9図)「(7)

やすなり申やう、しよせん泰山府君の祭りを仕り候はん。玉ものまへを御幣通りの役に出させ給へと申あひだ、しかるべしとて種々のてうほうをこしらへ、しらよねを十二こくちらして、泰山府君をまつらんとしける時、玉ものまへを御へいとりにちやうじぬる所に、女房、顔のけしきへんじて申やう、いやしと申ながら、かたじけなくもれうがんに近づき奉るもの也。さいれいのへいとりなど申候は、いやしき下女、下部などの役とぞ、うけ給り候へ。さしも多き人の中に、われ一人にかざりて恥をあたへられまいらすべきやうや候と、まことに遺恨ふかげに申けるを、時の大臣の玉ひけるは、かやうの一言もは、かりある事にて候へども、しゆくよの御やうじはさうこくさうじやうをもて、時の吉凶をさだめ、ことの善悪をあきらめ候なり。しとだんなど年と月と日と時とさうじやうするをもつて、祈祷の正しゆとす。院中に男女其数お、しといへども、ちからなくさうじやうせさせ給ふによつて、おんやうのかみ、さし奉る。そのうへ玉体つ、がなくおはしまし候はん社、御身も御身にて候はんずれ。御惱たちまちに御平愈候は、いかやうのいやしき御わざも何かくるしく候べき。大しやう釈迦如来はぜんえせんにといわれさせ給ひし時、ねんとう仏の道を過させ玉ひし時、道のわろくて立やすらい給ひけるに、ぜんえせんにな、髪をみだして石の上に敷て、仏を通し奉る。又聖武天皇の後、光明皇后は、百日の湯をわかつて千人にあぶせ、垢をすらせおはしまし候ひしを、御わざと申たる人は一人も候はず。うきよをいとひ、うき世をおそれさせ玉ひ候御心ざしの程をかんじ奉りて、和漢兩朝にせう美さんだんせられましく候ぞかし。院の御惱平愈候はんが為に、泰山府君のへいとらせ給ひて候はんずる御心ざしの程をこそかんじかはいよにこそ候はんずれ。すべてそしりは候まじく候物と申されければ、道理至極して御幣取の役に出たちけるとぞ聞ゆる。」

(8) 此人けふをはれと装束きたまへば、まことに言語のおよぶ所にあらず。既に幣をうけとりて、さいもんをよみけるなかばに、御へいを打ふるとぞ見へし色変じて、玉もの前かき消やうにうせにけり。やすなりが申す処、掌をさすよりもなを嚴重也。いかゞしてかの狐をうしなひ候べきとせんぎ有て、武士をあつめてからせばやといふざりけるに、あるぎにはその身ちくるいといひながら、天竺、震旦、日本三国にげんじて、神通自在を得たるものなり。仏力法力なをもつてしりぞけ難し。いわんやばんぶのちからにては、かれを失むこと、かなひがたと申されけるに、またあるぎには、諸法はすきんよりしやうじ、えんよりめつするならいにて、ほとけの説得給はぬ衆生をもばんぶのよりてけどしたる事も候ぞかし。わが朝におきてばけのあらはる、は、日本にて失ふべき故也。弓矢のせいをえてかみやをもるほどのものなど、いかでかの狐をいとゞめざるべき。漢朝のけいかは、九つの日を射おとし、我朝の頼政は、雲井の鶴を射落し、秦の始皇は、霞のうちの雁をいとおとし、またしはといひしものは、雨にあひてはらをたて、ぢきに雷声をいおとしける。これ皆弓矢の達者、かみやを射しもの也。今も日本に名を得たるゆみの上手をあつめてからせん、何の子細か候べきと、をのく申ける。」(9) (第10図) (10)

## (第十一段)

此義しかるべしとて、名譽の武士をたづねられけるに、上総介、三浦介、兩人こそと人々申されける間、院宣を下され、両介をめされけり。そのめん宣にいはいく、太上天皇の御惱につけて、おんやうのかみややすなり申むねあり。下野の国那須野にたけ七ひろのきつね有り。彼きつねをうしなはれば、御惱すみやかに平愈あるべしとうんぬ。彼所に臨て、くだんの狐を狩しんぜよと也。此院宣つきぬれば、両介行水して浄衣を着し、庭上にひざまづきて三度拝して是をうけ取申。やがて一門を催してぐむ

ぎに、東国に弓矢とり多しといへども、身にあって、院宣を下さる、条、家の面目といひ、時の名誉と云、何ごとかこれにしかん。しよせむ我を我とおもはん人は、一人ものこらず彼所にかけて出、ゆみの秘術をつくすべしとて、時刻をめぐらさず、我さきにとかけ出けり。彼野を見めぐらすに、べうくたる曠野の、草ふかく人のわけ入べきやうもなし。然といへども、しゆたのになぜいをもて草をきりはらひ、馬にまかせてかけ入、おのく楊由が弓の術にもこへ、りくわうかみやにもすぐればやおもひて狩まはず所に、少もたがはず、きはめて長く大なるが尾ふたつある狐、茂りたる草むらの中より出たり。両介が手の者共、高名せんとかけまはせども、神通を得たるものなれば、弓手にあへばめてにきれ、上へとび下へくゞり、四方八方すこしもとゞこふらず、むくうじぎいなる間、終にをひうしなひぬ。」(11) (第11回) (12)

(第十二段)

その時人々評定してはいはく、われらが弓の分限にては、いかにもかなふべからず。暫国へ歸りて、弓矢のはかりごとをめぐらし、ぶやうの道をも稽古して、其後狩べしとて、面々に住所に歸りける。上総介がはかりごとには、きはめて早き馬にまりをつけて、まりの落る所を矢所をしてかけまはしける。三浦介がはかりごとには、犬は狐に似たるものなればとて、犬をかけさせて、百日稽古して、ふしぎの矢所を射出してける。その、ち、また那須野におもむきて今度をさい期と狩けるに、猶狩得ずして、七日七夜逗留す。七日も既に過ければ、家の子、若党も皆く退屈す。その時両介高き所に立あがり、評定するやう、此ことによつて我く長く弓矢に疵をつけむこと、生涯の恥辱、これに過べからず。心のはやる事は樊噲、張良にもおとらじとこそおもひ、又謀の深き事もしばうにもすぐればやと社存ずれども、眼前の勝負にもあらざれば、身を捨、命を失ふにもあらず。進退是に極りて、せひに所なし。所詮此狐を

狩えずは、二たび本国に歸るべからず。今より弓矢を捨、山林にまじはり、ながく氏神をすて奉る身となるべし。南無婦命頂礼、日本国中の鎮守、伊勢天照太神、はくわうじ、八幡大菩薩、ことにはうつの大明神、氏神、日光権現、明日の中にかの狐を我々が手に懸て狩とるやうに御納受候へ。いかなる神通自在の鬼神なりとも、王位におそれざるべきや。末世におよぶといふとも、日月地に落給べからず。伝聞延喜の御門は、いかなれば飛鳥をだにもしたがへて召に随ひ奉る。王位のおもきこと、かくのごとし。またく私にあらず。勅定のかたじけなきゆへに、身をだになく、夜昼謀をめぐらせども、ほん夫の身にては随へがたし。今頼む所は神明仏陀ならではなし。我々をもとのごとく本国に歸し給ふべくは、神変をもて告しらせ」(13) たまへと掌を合せて祈念し、少まどろみたる三浦介がゆめ、年の齢はたち計りなる女性の、きはめてみめかたち人にすぐれたるが、涙をながして申やう、今度はからざるに命を汝に失はれんこと、恨の中の恨也。明日の命を助け玉へ。子々孫々の守の神と成て、千世をふるとも忘るべからずと申ければ、夢の中に、まつたく私のわざにてあらず。勅定のおもきがゆへ也。我を恨る事なかれと申に、やがて夢覚て後、家の子、郎等を催ふして、只今まどろみたるゆめのふしぎさ、狐をとゞめんことあんのうちなるべし。うちたてやものどもとて、馬のはるびをつよくしめ、各々夜の明方に、かの野へかけ出て、狩まはず所に、朝日の出るとおなじく、くだんの狐、野より山にむかひてはしり入らむとする所を、三浦介、馬に鞭を二打三打あて、よりあひ、弓手にあひつけ染羽のかぶら矢をもて、ちうに射落しぬ。えたりやとやごたへして馬よりおり見れば、聞しよりもおびた、しき物也。是を夜を日につぎて早馬をたて、我身も上洛す。院も頓てゑい覽有。前代未聞の事也と御感のあまりに、汝、那須野にて是を狩たる装束たがへずして、御前にてふるまふべしと、あかき犬を一疋ひきかけて出されたり。去程に両介が

さきがけ成馬に金ぶくりんの鞍置、あつぶさのしりがいに、きりふの矢  
おひ、しげどうの弓に染はのかぶらつがひてかけまはず。院中の上下、  
万人是を見物し給はぬ人こそなかりけれ。当時まで犬追物と名づけしは、  
此狐の根元也。きつねはほうざうにおさめられたり。くはしき事は記録  
に有。一、狐のはらの中にこがねのたうあり。此たうの中にぶつしやり  
有。」(14) (第12回)「(15)

(第十三段)

これをぬんへめさる。一、ひたいにはしろき玉あり。よるひるをてらす  
徳あり。是は三浦介とる。一、ふたつの尾のさきにけん有。一は白し、  
一は赤し。しろいは上総介とる。赤きをば、じないしやうりうじにおさ  
む。上総介、平家をうらむ事ありて、此剣を伊豆の兵衛佐殿に奉る。そ  
のずいさうに世をとり給ふなり。」(16)

## 釈文

臨川書店刊

『京都大学蔵むろまちものがたり5』より

『たま藻のまへ』凡例

・各詞書ごとに段落を改め、段数を示した。